九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

黄霧著《近代文学批評史・緒論》訳注

甲斐, 勝二
福岡大学人文学部

東, 英寿
鹿児島大学教養部

秋吉, 收
福岡大学人文学部

https://hdl.handle.net/2324/19703

出版情報：福岡大学人文論叢. 26 (4), pp.1835-1866, 1995-03. 福岡大学研究所
バージョン：
権利関係：

黄霖著《近代文学批評史・緒論》訳注

甲　斐　勝　二
東　　英　寿*
秋　吉　　収**

はじめに

ここに訳出する黄霖氏の著書《近代文学批評史》は，復旦大学王運熙・顧易生両教授の主編になる《中国文学批評通史》の第7冊分巻である。この通史については，『日本中国学会報第46集』（1994）の学会展望（文学）の部分に，伝統的な研究方法の集大成的なものとして紹介されているので，ご存じの方も多いと思う。これまで漢・魏晋南北朝・明・近代の各時代に関する4冊が出版されているが，残念ながら未だ全巻は出版されていない。隋唐部分がまもなく出版されるとの事である。この内，第2冊分巻《魏晋南北朝文学批評史》の緒論部分については，まことに拙いものであるが，すでに小生どもの訳注がある(1)。

日本において，中国文学批評史の通史にわたる研究は比較的少なく，また中国で現在行われている批評史研究の紹介も余り見受けられない。そこで文学批評史に関する書籍の訳注は，この分野に興味を持つ人々にとって，大いに意味があると，甲斐と東の二人で始めた次第である。この「《近代文学批評史・緒論》訳注」は，その仕事の継続である。今回は，近・現代文学の研究に従事されている新進気鋭の秋吉氏の参加を得る事ができた。

---

* 鹿児島大学助教授
** 本学非常勤講師

さて，復旦大学が，この文学批評史の領域に於て特色ある研究業績を挙げていることは，すでに故人となった朱東潤氏や郭紹虞氏の名を出すまでもなく，周知の事と思われる。さればこそ，国家重点研究項目の一つである批評通史全七分巻の完成を受け持つ事になったのであろう。その最終巻である近代部分を受け持たれた黄霖氏は1942年生まれで，復旦大学に進学後，中国における批評史研究の草分け的存在朱東潤氏のもとで学んでいる。専門は批評史および白話小説研究である。現在，復旦大学の教授で博士研究生指導員，中国語言文学研究所の副所長を務め，中国近代文学会常務理事やその他幾種かの学会の役職を兼ねる。業績は数多く，この《近代文学批評史》も近年の代表作である。我々の力では，この《近代文学批評史》の書評まではできないけれども，目だった特徴を一つ挙げておけば，それぞれの人物の主張の共通点と差異について明快な記述に務めている所であろう。訳出した緒論にも窺われるように，流派の区分にはしっかりした考察があり，それが本文に明確に示されていることをここに述べておく。

翻訳に当たって，原文では独特の表現や言い回しがあったが，残念ながらそのニュアンスまでは十分に訳出できなかった箇所もある。しかし，この訳注の方針として日本語として分かりやすい訳文，達意の訳文を目指している以上，仕方がないとご容赦を願いたい。もっとも，それでもまだ生硬な日本語が散見するのではないかと危惧する次第である。近代の定義，階級区分などについての表現は，すでに中国で定着したもののようで，文中に格別の議論はない。よって，我々もそのまま用いている。注釈は，これまでの方針どおり極力《近代文学批評史》本文の各論の論述に依拠した。この書籍の概ねの論旨や主張が，この緒論の訳注によってほぼ了解されることを目標とするからである。原典の確認については可能な限り行ったけれども，手元の資料不足のため，確認，附注できないところもあった。特に清代の部分は，《清代文学批評史》がすでに出版されていれば，注釈ももう少しうまくできていたかも知れないと悔やまれる。このような時，地方での研究者は場所による資料の制限性を厳しく感じる。ご了解願いたい。ただし，少しでも正確なものをと，著者の黄霖氏に手紙で出版後の修正箇所の有無について尋ねてみた。黄霖氏によれば，目だった修正箇所はなく，それほどの問題はないそうである[2]。

なお，参考資料として，この書籍の目次と簡単な年表を巻末に挙げておく。緒論に登場する人物の多くに専論が準備されているのが了解されると思うし，中国の近代の慌ただしさもまた知れると思われる。種種のご指正をお願い致します。

末筆ながら，訳注作成のお願いに快諾を与えてくださった黄霖氏，およびシリーズ主編

の王運熙，顧易生先生にお礼を申し上げます。

注

（1）「王運熙・楊明著『魏晋南北朝文学批評史』訳注（一）（二）（三）」甲斐勝二・東英寿。福岡大学人文論叢 24-3（1992）・25-3（1993）・25-4（1994）

（2）黄霖氏の了解をえて一箇所だけ誤植を改めた。原著4頁3行目「文誠工，何関道之喪」の部分，誠は誠の誤植である。

中国近代文学批評史

（緒論：中国文学批評の近代化）

中国の近代史は，1840年のアヘン戦争に始まり，1919年の五四運動までである①。

中国近代史とは，世界に目を開き，変革に尽力した歴史である。この80年間の歴史は，上下の時代と連なっていて分割できないけれども，それはおのずから独自の性格を持つ。この80年間の大変革の歴史の進展の中，中国人民が変革に努め撃ち破ろうとした対象は，帝国主義と封建主義である。変革を探る武器は，科学と民主であった。変革の理想は資本主義工業社会の建設である。変革の主体は，地主階級の中の先進者から転化してできた民族資産階級である。人々を団結させたその旗は，愛国であり，救国であり，強国であった。

中国の資本主義生産関係と新しい思想観念は，つとに明清の時代からゆっくりと萌芽し，発展してきている。龔自珍は中国封建社会の最後の詩人として近代社会に歩みいろうとするとき，封建社会がすでに「日の暮れるや，悲風集まり到る」という衰世に入っていることを敏感に感じている②。アヘン戦争の砲火は，国を閉ざして外界との往来を断っていたその大門を轟と共に打ち開き，封建朝廷の甘い夢を大いに驚かせたのである。おいぼれた大帝国は，無理やりに近代世界の競争の枠組みの中に引き入れられ，西方資本主義の怪物に，次々とうち負かされて，硬直した屍が腐臭を発した時，中華民族は空前の大災難に遭遇したのだ。中国はどこへ行くのか。大志を抱き人類に貢献しようとする精神の持ち主たちは，それぞれの階級の利益と独自の思考に照らして，苦しみながら国を救うための方法を探していた。龔自珍を代表とする地主階級経世派達は，「その憂患に堪えず，つねに天を指し地に画いて，天下の大計をねり」（梁啓超《清代学術概論》），努めて「法を更め」「改革」しようと計画していた（龔自珍《乙丙之際箸議第七》）が，しばしば「薬局は昔の丹薬を売るばかり」（龔自珍《己亥雑詩》）という限界に陥ったのである③。太平天国などそれぞれの激烈な農民運動は，本より帝国主義の侵入と，腐敗した封建王朝に重大な打撃を与えたのだけれども，その偏狭で遅れた意識によって，同様に封建主義の枠の中から飛び出すことが難しく，結局失敗に終わったのである④。これと同時に，アヘン戦争から五四運動までに，一群また一群と，世界に目を開いた傑出した人物が現れた。彼らは受動から主動へと，盲目から自覚へと，部分から全体へと西洋文化を勉強し，中華民族の進む道を探ったのである。たとえ，彼らが一時的には「名教の罪人」，「士林の風上にもおけ

ない奴」と非難され，しばしば封建統治集団の残酷な弾圧と封建復古勢力の絶え間ざる妨害をうけたとしても，しかし，結局は困難な曲折を経て一歩一歩中国近代化の過程を推進したのである。本国に立脚し，世界に目を向け，科学と民主を求めて帝国主義の侵略に反対して，封建専制統治をひっくり返すことこそ，中国近代社会が進む本流でありその方向であることは，歴史がすでに証明済みである。

中国近代の文学理論批評は，まさにこの歴史時期の産物である。その過程は，政治経済の変革及び文学創作の発展とは，完全に歩調を合わせるものではないが，この大きな環境の影響と制約を受けることは避けられず，独特の近代の息吹をはっきりと示している。その近代化の過程は，概ね次の二つの時期に分けられる。

第一の時期は，概ねアヘン戦争の開始から日清戦争の終わりまでで，これは近代文学の観念が初めて萌芽する時期である。アヘン戦争の失敗は一部の先進者達に，現存の政治，軍事，思想，文化の進展に対する多方面の反省を促した。このような反省は，限定的にしか認識されていなかった西方世界を，無自覚のうちに参考とするものでもあるけれども，根強い中華思想が，たちどころに相手方の本当の姿と自己の持つ問題点を見極め難くさせ，突き進めば到る「古今未曾有の変」の性質と方向を明らかにし難くさせてしまうのである。たとえ，当時徐継畬や梁廷枏などが，欧米の民主制度を賛美し始めたとしても，多くの人は，西洋の「製品や技術が優れる」所をみるばかり，また「経世致用」のスローガンの中に「外国の優れた技術で外国を抑える」といった新しい血液を注ぎ，船や大砲を整え，先進の科学技術を取り入れることによって，軍隊を強化し侮辱されないようにすることを希望するばかりなのであった⑤。よって，近代の文学思想の変化は，中国と西洋の文学観念との直接衝突に始まるのではない。地主階級中の一群の改革者達を端緒とするのであった。彼らは自分達なりに現在の政治形態と文化構造を整えることを出発点として，文学が変革の時勢に適応すべきことを強調したのである。龔自珍，魏源，姚瑩，梁廷枏　林昌彝等が，文学は時弊を風刺し，愛国を誉め讃え，個性を豊かにと呼掛け，ひいては「沈欝でたゆたう」スタイルを提唱したこと，及び，道統や文統にたいしての突進攻撃等等に到っては，すべて地主階級の内部から生まれた叫びなのである⑥。しかし，これらの声にはともに時代の特徴が深く刻まれている。古い文学体系を打ち壊すために，新しい理論と観念を迎えいれてその準備をしたのであった。

このようにしておよそ30年が過ぎた。外国に駐在する使節や，留学生及び様々な道筋から世界へと向かう人々が次第に多くなるにつれて，欧風の風情に染まってきた改革派は，

理論上では依然「中国の道徳と名教を大本として，諸国の富強の方法を助けとする」（馮桂芬《校邠廬抗議》下巻）ことは堅持しつつ，その一方，西洋では「詩賦文章を尊ばない」（王韜《漫遊随録・扶桑遊記》）と誤認し，西方の「物理や製造などを学ぶことが，根本であり，言語文学などは枝葉である」（鄭観応《盛世危言》）などと言っていはいても，しかし，彼らは文学上では，「心にかなうものを述べるべきだ」（馮桂芬《復荘衛生書》），「胸のうちを表せ」「ひたすら胸の思いの発するままに」（王韜《弢文録外編自序》）と主張している。故に，その実質は，資産階級の新しい性格をすでに内蔵しているのであった⑦。1868年，黄遵憲は「我が手により我が口を写す」という詩歌の主張を打ち出した。1877年，彼は日本と西洋の文体改革の経験を自覚的に参照したことを基礎にして，「明瞭でよく分かり，意図の伝達に努めた」，「今に適応し，一般に通用する」（《日本国志・学術志》）新しい文体を創るべき要求を提出した⑧。その平生の経歴と新派詩の創作実践を結びつけて考えれば，これらの主張は確かに新しい彩りを持っていた。実際に，アヘン戦争から日清戦争に至るこの半世紀あまりの緩慢な流れの中で，ある学者たちから「封建正統勢力」の代表と目頃見なされていた宋詩派，桐城派ですら，一枚岩で変化しないものではなかったのである⑨。何紹基は「自己の独立」（《使黔草自序》）を強調し，姚瑩は「経済」・「多聞」（《與呉岳卿書》）を重視し，梅曾亮は「文章が誠に巧みだとしても，それが道の滅亡と何の関係があろうか」（《李蘊山時文序》）と思い切って言っている⑩。続けて曾国藩から呉汝綸，厳復，林紓に至るまで，すべての人物は注意深く「時に応じて変化」し，間接にあるいは直接に時代の鼓動を反映しているのである⑪。時代は変化していた。文学も文学観念も変化していた。このころの変化は，古い網を撃ち破れてはいないし，鮮明な新しい色彩を示してはいないが，すでに新しい未来へと歩みはじめていたのである。

第二の時期は，維新変法から五四新文化運動までで，この時期は，急激に変化した完成期である。日清戦争に惨敗し，洋務派の多年の苦労が完全に水の泡となり，封建王朝の腐敗と無能が余すところなく暴露され，新しく起こった維新派は，科学，技術，実業で国を救うという枠の中から遂に飛び出し，政治形態・思想・文学などの，あらゆる角度から西洋文明を参照し始め，国を救い強化するための出口を探しもとめたのである⑫。彼らがまず導入した進化論，民権論は，まるで二門の大砲のように，伝統思想の文化体系を猛烈に破壊し，中国を中心におく中華思想の考え方を吹き飛ばし，またたく間に中国と西洋の文化との大衝突，大融合という歴史潮流を作り上げたのである。この近代化の歴史潮流の中

で，梁啓超・厳復等は，まず封建文化を強く否定し，さらに情熱的に文学の変革を導いた。特に，戊戌の変法の失敗から，維新派は大衆が意識改革をしなければ，「変法」や「新政」は実現できないと強く感じていた⑬。「もし新しい人民がいれば，新しい制度，新しい政府，新しい国家はなくても何も困らない」（梁啓超《論新民為今日中国第一急務》）と。そして，「新しい人民」を求めるために，最も有力な武器は疑いもなく文学と教育であった。そこで，梁啓超らは文学の領域に大がかりな陣容で全面的な改革運動を起こし，欧米や日本文学の新しい内容の輸入に大いに力をいれて，中国伝統の文学を改造しようとしたのである。一時期の間に，「詩界革命」，「文界革命」，「小説界革命」，「戯曲改良」等のスローガンがあまねく轟きわたった⑭。理論の提唱と創作の実践は結合し，新しい文学観念，新しい文学形態，新しい表現形式がどっと押し寄せ，中国文学の近代化の潮流は沸き上がり，止めようがなかったのだ。この急激な過程の中で，資産階級では，文学の効用，文学の性質，創作の原則，創作の方法，文体の構造，文学の言葉等の一系列の大きな問題に対する認識の質が飛躍的に高まり，そのうえ中国文学の世界文学の中での位置づけを探す努力をしているのである。このような革新運動が獲得した理論的成果は，事実上中国文学の近代化の過程における主要な標識であり，しかも，その現代化に向かう根本方向を規定するものであった。

二十世紀の初めのこのような勢い盛んな文学革新運動の発動者とその主力は疑いもなく資産階級維新派である。資産階級革命派も，参与したか或はその影響を受けたのだ。1905年，中国同盟会の成立は，政治上資産階級革命派が，まさに維新派にかわって，近代中国社会を前進させる指導勢力となりつつあったことを示している⑮。「外国人を駆逐し，中華を回復し，民国を創立し，土地の権利を平等にする」事を目標とした資産階級革命派の文学主張は，一般に維新派と違うところが確かにある。最も突出した点は，文学が民族や民主革命に服務することを強調した所だ。この他に，多くの人が，文学と社会との関係の問題において，維新派よりも比較的冷静で，客観的な認識を持っていた。しかし，革命の高まりの中にある資産階級革命派にあっては，最初から最後まで，一つの明確な文学政策を定めることはできず，梁啓超のように気力に満ち，視点の定った主将を持ち，成功裏にいわゆる「晩清第二次文学運動」を起こすことはなかったのである。全体的にみれば，彼らはやはり先達の文学革新の道に沿い，更に一歩を進めて補充をし発展をなした。また，章太炎などの鮮明な革命派の特色を持つ文論作品の様なもの，例えば《革命軍序》等はちょうど1905年以前に発表されているが，政治上改良派に属す王国維のいくらかの重要な作

品の様なものは，例えば王国維の《人間詞話》，《宋元戯曲史》等は，1905 年に書かれており，さらに辛亥革命以後のものさえもある⑯。よって，流行する一つの時代区分法は 1905 年，或は少し遅れて南社の成立した 1909 年を境界線として，この時期の文学の過程を 2 つに分けるものであるが，これでは文学批評史発展の実際とは合わないことになる⑰。中国文学理論批評の近代化の過程は，資産階級維新派が革命派と一緒に完成させたのだった。彼らはいくつかの観点において違いがあったけれども，時間的にはその先後は分かち難いのである。ある文学史などは 1911 年以後の近代文学を「低潮」，「停滞」期として区別するが，これも文学理論批評の発展の実際状況と符合するものではないのだ。特に小説や演劇の領域では，この時期は小説創作の再度の繁栄と演劇改良の勢いよい展開につれて，呂思勉，管達如，斉如山，馮叔鸞，鄭正秋等が，一連の小説演劇評論を書き，過去を総括し，現在を指導して，文学理論批評の近代化の過程を，なお前へと進めつつあったのである⑱。これを要するに，維新の新法から五四運動までの，この短い二〇年の間の文学観念の近代化は，一つのまとまった過程なのである。政治の情勢の変幻は，いくつかの段階にはっきりと分かれるまでには及ばないようだが，急激な変革は，すでにそれを慌ただしくも次代の大門へと導き入れていたのである。新しい変革は，新しい時代において，新しい階級の指導により，新しい方向に向けて発展することになる。

中国文学理論批評の近代化は，内容と形式の二種の方向からみることができる。形式からいえば，外国の書籍の翻訳紹介，専門論文の出現，思惟方法の改変，理論色彩の濃さ，これらはみな古代の文論とは違うものだ。文学思想，観念から述べるなら，その主要な変化は以下の十点にある。

第一，「実利の帰するところは，ただ一人」であった封建文学が，「人々に公有される」国民文学へ変化したこと。

文学史家の認めるところによると，近代中国資産階級の文論の一つの重要な特徴は，文学の功利性を強調し，ひいては言葉を誇張して，極端へと向かったことである。誠に梁啓超が言うように，「彼のアメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・オーストリア・イタリア・日本各国政界の日々の進展には，政治小説の果たした役割が最も大きいのだ」（《訳印政治小説序》）し，黄遵憲は欧州の詩人を「ついには世界を左右する力をもつ」（黄遵憲致丘菽園信）と誉め上げ，蒋智由は「文学が成功を収める日，全地球は革命の潮の中」

（《盧騒》）と鼓吹する⑲。これらは，典型的に維新派が文学の功利的特徴を過大に誇張することを表している。革命派になると，高旭のように文学に「乱れ揚がる大波をもとにもどし，焼けつくされた灰の中から立ち上がらせる」（《南社啓》）ことを求めたし，周樹人は，「中国人民を進展させるには，必ずや科学小説から始めねばならない」（《月界旅行弁言》）と考えていて，やはりこの傾向から外れるものではない⑳。しかし，ただ文学の功利性を強調することについてのみ指摘することは，決して近代資産階級の文論特有のものというわけではない。中国の古代では，つとに「立言」を立徳，立功にならぶ「三つの不朽の仕事」（《春秋左氏伝》）のうちの一つとみなしていた。魏の曹丕が，文章を「経国の大業」として以来，明代に馮夢龍が文学に「天を目覚めさせ」，「世を目覚めさせる」効力があると鼓吹するに到るまで，文学の功利性を無視していたと言うことはできない㉑。よって，ここで，性格の差を区別する鍵は功利性を重視するかしないかにあるのではなくて，その功利性が誰のためのものであるかにある。言い替えれば，文学は誰のためのものであるかという問題なのだ。中国古代封建社会中の文論は具体的に文学の効用を論述するとき，「興じ，観じ，群し，怨す」（《論語》）から「文は以て道を載す」（宋・周敦頤）まで，また「世に補するあり」から「勧善徴悪」まで「人々のため」という一面に注意する人はいても，主導的地位を占めていたのはやはり「君主のため」であった。よって，周作人は1908年に，鋭く封建文学の実質を突いて，「わが国は数千年来儒学に統一されてきた。思想は拘禁され，文章は疲労困憊し，趨勢の示すところは，衰亡に近い。しかし，実利の帰する所はたった一人なのである」（《論文章之意義暨其使命因及中国近時論文之失》）と言ったのだ。近代が始まるや，血生臭い現実や，厳しく辛い状況が，この時代の文学家に特別に強い憂いと使命感を負わしめた。かれらは，文学が時世を救済し，侮りを防ぎ自衛して，世を治めるための道具となるべきことを奮い立って叫んだのである。姚瑩が文学と「経済（経世済世）」との関係を強調し，方東樹が「文章は世を救うものではないなどは，皆無用の言である」（《復羅月川太守書》）と叫んでいたとき，実際には文学が封建王朝に仕えるだけの狭い囲いをすでに打ち破っていた㉒。そこには，民族の危機を救い中国の社会を改造しようとするもっと大きな意義があったのだ。後，西洋民権論の伝播に従って，「国民」意識が目覚めて，維新派が立ち上がり「群治」のため，「新民」のために仕えようとした。彼らは文学を後進社会を改造する武器と見なすばかりでなく，国民の精神を改造するための道具ともしたのである。梁啓超が《新小説》雑誌を創刊した主旨は，「国民の精神を振るいたたせ，国民の知識を解放する」というものなのだ。彼は

「今日の最も重要な事は，中国魂を作り上げる事なのである」と公言するのであった。陳去病らは《二十世紀大舞台》を主宰したが，やはり「国民思想を喚起する」ためのものと言っている㉓。このような状況の下で，人々は文芸が「国と民の命と魂がそこに表現される」（黄遠生）ものと考えるようになった㉔。つまり，「国民の精神の寄託場所なのである」（周作人）。文学創作の目的は，「国民」の為であり，「人生」の為なのである。周作人は，近代における文学観念のこのような大変革をまとめて，「一人の人物から奪い上げ，これを人々の公有にした」と一言で言ったのだ。当時彼らが言っていた「国民」，「人々」というのは，資産階級の指導下にあった人々の事である。よって，文学の封建王朝への奉仕を改めて，広大な「国民」のために奉仕するものとすることは，文学の性質と方向を根本的に改めた事になるのだ。これは疑いなく近代における文学観念の変革のなかで，最も重要な特徴なのである。

第二，雑文学の体系を打ち破り，純文学の観念を打ち立てたこと。

中国古代の「文」と「学」は，本来区別されるものではなく，魏晋南北朝に至って両者の領域が明確になりだしてくるものである。しかし，総体的にいって伝統的な「文学」概念といえばなお雑文学の範疇に属していた。近代の章炳麟に到っても，「竹や布に文字を記したもの」が「文」と言う。とはいえ，それに反して通俗小説と戯曲は，しばしば「文学」の殿堂の外にはじき出されてしまっている。中国の伝統的文学理論批評の基本体系は，正しくこのような雑文学の基礎の上に構築されたものであって，その結果，ある系統の概念，範疇，理論，及び相互間の批評，論争は，決して文学芸術の本質に深く入ることができなかった。近代の文学家は，義理・考拠・文章の複雑な絡み合いの中で，だんだんと文章が独立の価値を持つべき事を認識するようになってくる。駢文派の台頭，ひいては桐城派中の梅曾亮が「わずかに知るのはただ文字のみ」（《答呉子叙》）と述べ，曾国藩が「道と文，詰まるところ離して2つのものとしないわけにはいかない」（《与劉霞仙書》）事を提起したなどは，共に偶然の出来事ではないのである。しかし，桐城派の文士達は，やはり《古文辞類纂》・《経史百家雑鈔》を古文の模範として，最終的には雑文学の体系を打ち破ることはできなかったのだ㉕。雑文学の観念を根本から瓦解させ始め，新しい純文学の観念が打ち立てられたのは，梁啓超・王国維・蔣智由・金天翮・黄人・徐念慈・周樹人・周作人・管達如・呂思勉・斉如山・黄遠生・馮叔鸞等によって，絶えず途切れずに，異なった角度，異なった方面から西洋の純文学思想と美学観念が導入され宣伝され続けたからなのである㉖。この過程にあって，王国維は，カントとショーペンハウエルの純粋芸

術哲学を依り所として，かなり系統的に文学芸術の審美特徴，及びその本質の所在を明らかにして述べている。彼のこのような「功利を超える」純粋芸術理論は，長い間の文芸工具説への一種の反動であるとはいえ，大変革の時期にあたり，全力で闘っているという時代精神にも背くものとなった。「純文学」の理論に傾き，また「精神界の戦士」にもなろうとした周樹人は，この矛盾の中で文学の「不用の用」を捜し求めようと思ったのである。これに対して，黄人・徐念慈等は，「文学が美の一部分であること」を肯定し，かつ，多方面からその「美」の属性を論述すると共に，また美と真・善の「三者が相互に関連を持つ」ことを強調し，「誠を求めて善を明らかにできずに，ただ文学を文学としようとすることは，結局の所その最大の目的には到達できない」とはっきり指摘するのであった。このような色々の文学審美特徴に関する研究は，すべて純文学観念の構築を押し進めたのである。しかし，純文学観念が打ち立てられることは，即ち「文学」自身の理解に対する一つの大きな進歩に他ならない。これは，近代文学理論の構築にとって，疑いなく重要な意味を持つのである。

第三，「ただ性霊を表現する」説から創作の「自由」論への進行。

明代は，資本主義生産関係の萌芽につれて，李贄を代表とする王学泰州学派の異端思想が流行して，伝統的な「性霊説」が広く行われることになった㉗。袁宏道が提起した「ただ性霊を表現して，格式にはこだわらない」というスローガンは，何代にもわたった傲慢な人士の心情を揺り動かしたのであった㉘。近代に踏み込んだ龔自珍は，「心を尊ぶ」，「情を尊ぶ」事を声高に叫び，自我を尊重し，個性を解放することを強調した。彼の友達の何紹基は努めて「俗ではなく」「真の自己の自立」，「一人で自由に行う」ことを旨としたが，これも同様に個性の独立と創作の自由を追求するという意義を持つものなのである。しかし，彼らが提唱した個性解放の理論の基礎は，主に儒・仏両家の体系の中から練り上げられてきた主観唯心論なのであって，基本的には，封建主義の範疇に属すものであった。やや遅れて，西洋資産階級の政治社会思想に薫陶を受けた馮桂芬，王韜，黄遵憲等が提唱した「心にかなうものを言う」，「胸中を延べる」，「我が手で我が口を表現する」等は，新しい含蓄はあったものの，しかし，近代的な色彩はまだ不鮮明であった。しかし，19世紀の六七十年代より伝入が始まり，1898年以降，維新派が西洋民主・自由思想を大いに宣伝してより後，世論でも「自由とは，精神界の命である」（梁啓超《十種徳性相反成義・其二自由與制裁》）と公認されるようになった。「思想の自由，言論の自由，出版の自由」のかけ声の中にあって，梁啓超，蒋智由等が資産階級の「自由主義」をもって「自由文学」

を創作し，文芸界の「近世紀の新天地」をうち開くことを大いに提唱する（蒋智由《維朗氏詩論》按語)。続いて，周樹人も立ち上がり，文芸は「個性」を公に知らしめ，「自由に発言する」もので，「強くたゆまず，真実を守って，群衆に媚びを売って，古いしきたりに従おうとはしない」ものだと，力弁した。資産階級文芸の「創作は自由である」の精神は，文芸界ではだんだんと人々の心を捉え，伝統的な性霊説を根本から改めさせ，封建文芸専制主義のもつ創作過程における精神的な束縛を突き破ったのであった。

以上の三点は，対象の受容，文学そのもの，創作の主体という三つの大きな方面に影響して，その基本的な性格の変化をもたらすものであり，（当時の文学の性格付けに対して）綱領的な意義を持ったのである。その三点は大きな三本の柱のように，近代の文学理論批評の全体構造に影響を与えたのだ。これらの他，まだいくつかの重要な変化がある。それは以下のように表れている。

第四，白話運動の展開。

中国文学史上において，白話（口語スタイル）と文言（文語スタイル）は，もともと長い間同時に存在していた。後，白話小説が盛んになるにしたがって，「通俗な表現でこそ遠くまで伝わるのだ」（《馮玉梅団園》），「天下には文雅な心は少なく，興味をもとめる心はたくさんある，しからば小説の場合も言葉を洗練させるものは少なく，一般向けにするものが多くなるのだ。」（馮夢龍《古今小説序》）等の言論もかなり流行している。しかし，これは詰まるところ主に白話小説の範囲内に限られていた。正統な文人学士は，一般的な白話を用いて文学創作を行うことに対して，しばしば軽蔑の眼差しを送ったのである。近代になると，文学が奉仕し，受容される主な対象に変化が生まれ，文学の効用もまた主に政治を刷新し，国民を目覚めさせる事に着目されたために，必然的に文学の普及性，一般性が重要視されるようになった。黄遵憲は外国の文体改革経験に鑑み「言文を一致」させ，「天下の農民・商人・工人，婦人・子供に到るまで文字の使用ができる」（《日本国誌・学術誌》）ようにせよと提唱した。その後，譚嗣同・梁啓超・陳子褒・裘廷梁・夏曾佑・王照等の人物が，次々と文学に用いる言葉の改革を唱え，「文学の進化には，大きな鍵がある。それは，古典語の文学を口語の文学に変える事なのだ」，「この口語体は，ただ小説家ばかりが用いるものではなく，文章ならばすべてそうであるべきなのだ」（梁啓超《小説叢話》）と考えた㉙。ひいては，ついに「白話を尊重して，文言を撤廃すべし」とのスローガンも声高に叫ばれて，白話運動の巨大なうねりを形成し，大量の口語読物が出現し

たのだった㉚。言語は思惟の直接的な現れである。文学言語の変革は，事実上近代の芸術思惟を変革する突破口となり，現代口語文学の建設のために，道を掃き清めたのである。

第五，文体構造の変貌。

中国古代では，ずっと詩と文が文学の正統なのだと見なされてきた。詞はすでに「詩の余り」であり，小説戯曲などは，そもそも大雅の殿堂に上るものではない。これは誠に黄人が《小説林発刊詞》において，「昔，小説は，博徒の様にみられ，タレントの様にみられ，時には害毒のようにもみられ，妖魔のようにもみられたのである。紳士達には歯牙にも掛けられず，図書館の四部分類にも入れてもらえなかった。・・・本当はとても好きでも，読むときはこっそりと読んだものだ。文章談議において小説の事をつい引用でもすると，みんなからあざ笑われたのである。」と指摘するがごとくである。しかし，民間においては，大きな市場を持っていたのだった。近代資産階級は小説戯曲が民衆に於てきわめて大きな教育・扇動作用を持つことに目を向けた。また「国民」の為に奉仕する方針と，純文学の観念が確立されるに従って，小説戯曲の地位の向上を特別に重視するようになったのは，誠に自然なことだ。梁啓超・康有為・厳復・夏曾佑等の人物が大いに鼓吹する中，しばらくの間に社会では「小説（考えるに，この「小説」概念には戯曲演劇が含まれる）こそが，文学の至上のものだ」とほとんど認められたようで，詩文の地位は下に転がり落ちてしまったのである㉛。樊増祥の詩には「秋の果実と春の華はまったく違うものであるのに，外国の言語文化が中国古来の伝統を掃き尽くしてしまった，龍の頭は欧州につながれてしまい，詩人は一番下のランクにおかれる羽目になった」（《賦詩》，《樊山詩鈔》巻三に見ゆ）と詠っている㉜。これは，西洋文学思想の影響の下，小説が純文学体系の構造にしめる地位が向上し，詩歌が転落した事についての，別の角度からの反映なのだ。当然ながら，このような視点にも偏りがある。黄人は，「昔は小説が余りにも軽く見られていたが，今では小説が余りにも重んじられすぎている。」と指摘した。彼は，小説を適当な位置に置くべきことを主張するのである。しかし，文学が発展して近代に到ると，小説戯曲を軽視する長い間の先入観は，とにかく徹底的に姿を改めたのであった。

第六，典型化の原則の輸入

典型化は文学創作の基本律である。中国の古代の文論家は，創作の実践の中からやはり，この問題に気が付いていた。例えば南朝梁の劉勰は「比興」を論じる際に，「興の技法に比喩を託すときには，婉曲だが明らかで，例えの具体的なものは些細なものでも，その指し示す領域は非常に大きいものである」と言う㉝。これは個別の事物が，一般的な意味を

持つことに触れたものである。とはいえ，総じていえば，詩文の基礎の上に立てられた理論批評では，この点ではかなり大きな制限を受けていた。後，小説戯曲の発展に従って，葉昼が「同じであるが同じでなく，そこにはちゃんと区別がある」と言い，金人瑞が「どの人物を取り上げても，すべてどこかで見たものばかりだ」と言い，閑斎老人が「日常の交際には，《儒林外史》にかつて出てこないものはない」と言うなど，鋭い論述がある。しかし，これは西洋の典型化理論とはやはりまだすいぶんな違いがあるのだった㉞。近代の西洋文学思想の伝入の過程のなかで，典型化理論もそれにしたがって入ってきた。もしも，夏曾佑が《小説原理》の中で，「実際の事件は常に淡泊なものだが，でたらめな事件は常に鮮やかなものである」と言い，王国維が《紅楼夢評論》の中で，「美術の特徴は，具体性を尊び，抽象性は尊ばない」と述べつつも，「美術が写そうとするものは，個人の性質ではなく，人類全体の性質なのだ」と唱えた等が，些か簡略に過ぎると言うのであれば，蒋智由の《ペローの詩学》でのコメント，周樹人の《ギボン美術意見書》，黄遠生の《新劇雑論》等が，文芸創作の典型化の規律をかなり明確かつ細やかに述べている。特に，この後に呂思勉が発表した小説専論《小説叢話》は，「美の制作」が模倣，選択，想像化，創造の四つの段階を経るものだと実に精密に述べている。芸術的典型化を経て後，「第二の社会を作り出す」もので，これが理想化・創造性の美であり，その人物の形象には更に普遍的な「象徴性」が備わるものなのである。彼は，大量のページをつかって，《紅楼夢》中の金陵十二釵の「象徴性」を具体的に分析して，いかにして小説中の人物形象の典型性を分析するかについて模範を示している。これらは，文学典型化の原則が，すでに中国の文学界に承認され摂取されていたことを力強く物語るものであった。

第七，創作方法の新認識

近代というものは，旧社会が瀕死におちいり，新社会がまさに誕生せんとする社会である。時代は，文学者に対してより厳しく現実を暴き，より情熱的に未来に憧れることを求めたのだ。龔自珍から始まって，進歩的な一部の文学者は「文字の獄を恐れ避けて，書くものは生活のためばかり」という恐れと束縛を打ち破り，「真」を主とする批判精神と「情」を主とする奔放主義は，共に大いに発揚されて，現実主義とロマン主義の創作精神が，それぞれ異なった作家に重視された。理論上では，伝統的な虚実・真幻・正奇などの範疇を継続的に用いて創作性の違いを概括し描写することが行われている。その一方では西洋の創作理論の導入，及び中国の文芸との実際の結合によって，いくつかの新しい認識が生まれた。梁啓超は，初めて文学を「理想派」と「現実派」との基本流派にはっきりと

分け，並びにそれらの持つ基本特徴について論じている（《論小説與群治之関係》）。蒋智由になると伝統的な陰陽剛柔の説と結び付けて，文章を「クール」と「ホット」の二種に分けた（《冷的文章熱的文章》）。これに対して王国維もまた意境説を融合させて，「理想主義的な境地の造境があるものと自然主義的な境地の寫境があるもの」の区別を提起したのである（《人間詩話》）。彼らはまた，両派の間にある，それぞれ異なりながらも共通な部分，互いに融合しまた互いに変化するといった問題に，程度を異にしながらも注意を向けている。その後，管達如の《説小説》，呂思勉の《小説叢話》等はこの問題に対してさらに進んだ表明をしている。これは，中国の文芸界が，現実主義とロマン主義という基本創作法の二つの考え方に対して，同一のものだという認識を持ち，また同時に民族の特徴を結合して，独特の認識を持つことが可能であることを物語るものだ。

第八，悲劇観の確立

中国の近代社会の全面的な危機と大きな災難は，同時代の文学者達の情感と審美観念を規定した。哀怨と憔悴，憂傷と憤怒，迷いと暴走などが織りなす主旋律は，悲と憤であった。龔自珍の天下の「拗怒（虐げられた怒り）」の暴露の呼掛けから，陳廷焯の「沈欝」のスタイルの提唱まで，孔広徳の「孤憤」描出強調論（《普天忠憤集自序》）から，劉鶚の「哭泣」表出説（《老残遊記序》）の提出まで，章炳麟の「雷霆之声」への呼掛けから，周樹人の「魔羅詩力」への期待まで，みんな悲痛の情，憂憤の歎が染み込んでいるのである㉟。それらは，伝統の「大団円」という固定形式と「中和」の美という審美的理想を，力強く突き倒し，西洋の新しい悲劇観を迎え入れたのだった。悲劇と悲劇に関する言論については，中国の古代にもある。近代が始まるや，梁廷枏は曲を論じるときに，「通俗な団円」に反対した。王国維は彼に直接啓発されて，西洋悲劇理論を輸入して《桃花扇》，《紅楼夢》及び《竇娥冤》，《趙氏孤児》等を賞賛したのである。しかし，王国維が《紅楼夢評論》，《宋元戯曲史》等の著作の中で明らかにしているのは，ショーペンハウエルの悲劇観で，その理論はかなり体系的ではあるが，精神となると消極的であった。これとは別に，蒋智由がほとんど同じころ積極的な悲劇観を提唱し，「悲劇とは，人の精神を奮いたたせ，人の性質を高尚にし，偉大な人物になることを学ばせるものである」と鼓吹した。彼は当時の中国の社会現実から出発して，悲劇と喜劇の中にあっては，「悲劇を主」とすべきであり，「ひらひらとした舞，じゃんじゃんなる楽器，その魂をうっとりさせながら，けしからぬ思いを助長する」事に，断固として反対したのである。彼らの「悲劇」に対する賛美と呼掛け，「悲劇」理論に対する導入と展開には，疑いなく時代の特徴が深

く刻まれており，同時に中国近代の審美観念の重大な変革も反映するものであった。

以上，第四・五・六・七・八の五つは，文学作品に内在する形式について論じたものか，それとも作家の創作の原則・方法及び審美観念について言ったものかを問わず，主に文学の創作に向けて発せられたものである。しかしながら，当時の歴史の舞台の上に登場した資産階級は，新しい理論を探して創作を指導することに熱心だったばかりでなく，加えて新しい観点を使って古今内外の文学現象の評論を試み，縦横の交差点上に自分達の位置を努めて探そうとしたのだ。ここに於て，新しい中国文学史観と，中外文学比較観が生み出されたのである。この二種の新しい文学観念は，当然ながらはっきりとした近代化の特徴を持っている。

第九，新しい中国文学史学の創設

一九一二年，王国維は《宋元戯曲史》（後に《宋元戯曲攷》に改名）を完成させたおり，序のなかで：「世の中のこの学問は，私に始まる。この学問に貢献する所も，この書籍にたくさんあると思うが，それは私の才力が古人を越える力量を持つからではなくて，実は古人にこの学問をした者がいないからなのだ。」と言っている。ここで言う「この学問」とは，即ち中国戯曲史学のことである。この発言は，頗る自負に富むものであるが，基本的にはその通りであった。実際に，戯曲史学だけでなく，中国文学史学全体にも，近代に至って大きな変革が起こったのである。中華民族は歴史精神に富むと言うべきであろう。中国の古代文論家もまたしばしば歴史的視角から過去の文学を整理し批評し，文学史的な性質を持った作品を多く編み出してきた。例えば，《文心雕龍》の上巻部分，《詩薮》等の著作は，基本的に時代順に作家作品の特徴に批評分析を加え，いくつかの理論問題も時には説明されている㊱。近代になると，劉熙載の《芸概》などが，実際には中国文芸史となっている㊲。しかしながら，総じていえば，それらの体系はやはり厳密さに欠け，作者の史学観念もやはり十分には明確になっていない。のち，「史界革命」の呼び声が日増しに高くなるにしたがって，西洋の資産階級の史学観点・史学研究法および，歴史編述の体例が導入され，それが又新しい文学観念と結合し，伝統文学史学にきわめて大きな衝撃を与えて，新しい中国文学史の著作が，相次いで出現するのである。その代表作は，例えば通史には黄人の《中国文学史》があり，断代史には劉師培の《中国中古文学史》があり，ジャンルを限ったものでは王国維の《宋元戯曲史》等があって，中国文学における歴史批評が確実に新しい段階に入ったことを示している㊳。これはまた，次の時代の中国文学史

の編纂ブームを直接的に引き起こしもしたのだ。

第十，中外文学の比較研究の始まり

中国近代文学批評史にあって，人々の目が一たび世界に向けられるや，中外文学の比較もこれにしたがって生まれたのである。1872年，蠡勺居士がイギリスの小説《昕夕閑談》を翻訳したとき，序言と評語の中で中国と外国小説の内容と表現手法上の異同に注意して比較している㊴。その後，梁啓超・黄遵憲・蒋智由・王国維・呉沃堯などの維新派ばかりでなく，黄人・徐念慈・王鍾麒・周樹人等の革命派もすべて，中国と外国の文学の比較研究に注意したのである㊵。これは，正しく周樹人がその比較研究の代表作《摩羅詩力説》の中で，「自分の国が本当に偉大であるのだと唱えたいなら，先ずこちら側の事を明らかにし，またむこう側の事も知る必要がある。比較がしっかりできてから，ようやく自覚が生まれるのである」と提起するように，つまりは，比較というものが自覚精神を生み出し，中華文明を奮い起こす大切な鍵なのだ。王国維も，こう予言している：「何時の日かわが国の学術を発揚してくれる人物は，必ずや世界の学術に通じる人物であって，孔子ばかりを信じている田舎儒者ではないだろう。（《奏定経学科大学文学科大学程章書後》」と。このような思想の指導のもと，当時の比較の範囲はかなり広がった。作家作品の比較も有れば，文学様式の比較もあり，ひいては内容題材・人物形象・ストーリーの構造および表現手法等の比較までもあった。比較の手法には，対照研究があり，影響研究があり，或は両者が結び付いていた。比較の角度は，西洋美学思想・文学観を重用して中国の作家作品を分析したり根拠を求めたりするのもあれば，中国文学を中心に据えて西洋文学作品を観察し理解しようとするものもいた。それを統合する精神は，中国文学及び中国政治を改造するという問題にしっかりと絡み付いていたのである。注意すべきことは，このような潮流の中にあっても，一部の論者はかなり冷静に中国と西洋の関係を扱うことができたことである。彼らは，「国粋」に固執し外国を排除して復古をはたすことには反対したし，「自己を軽くみて他人を重視し」（黄人《小説小話》）て，西洋を盲目的に重んじる事にも反対した。そして，「西洋の風格に心酔して，欧米人がことごとくアジアよりも上だと考える必要はない」（林紓《塊肉余生述前篇序》）「世界にむけた眼差しは亡くすわけには行かないが，本国の風俗にだって背くわけには行かない」（周剣雲《戯劇改良論》）と言い，「彼の新しい理論をもちいて，我らが文章制作を助けよ」（林紓《洪罕女郎伝跋語》），「新しい内容を吸収して，文学生活上の栄養とすべし」（黄人《中国文学史》）という態度を抱いて，「中国と西洋の二種の文学を一つに融合する」（林紓《洪罕女郎伝跋語》），「古今

を見比べ観察し，中国と西洋をともに鋳込む」（姚華《曲海一勺》）という正確な道を歩むべきことを主張したのである㊶。当然ながら，中外文学の比較は，近代になってようやく始まったばかりである。しかし，この一歩は，確かに中国文学が世界に向かって歩みだしたものであり，また近代化に向かって歩みだした重要な一歩なのであった。

以上の「三綱」・「五要」・「両観」併せて十点よりなる中国における文学観念の近代化の基本的内容と二つの発展段階をまとめて見るならば，それらを統べる特徴は一言で概括できよう。つまり，「変化」なのだ。この変化は，中国と西洋の融合による変化であり，旧来のものから新しいものへと向かう変化なのである。その形式は，もはや封鎖型ではなく，解放型に向かうものだ。その性質は，もはや同一階級内部の，異なる流派や意見による争いではなく，資産階級文化が封建地主階級の文化に取って代わる革命なのである。その思想基礎は，もはや儒・道・仏三家の天下ではなく，西洋の哲学・美学と社会政治学説を溶け合わせたものなのだ。その方向は，もはや伝統文学内部の自己調節・自己独善なのではなく，中国文学を世界に向け，現代化に向わせるものなのである。当然ながら，これはその主流について言ったものである。中国における文学観念の近代化の過程には，いくつかの支流・逆流があることも避けられない。文論家の中には，このような変革を認めることができず，消極的になったばかりか，一顧だにせず，ひたすら反対したものもいたのであった。しかし，彼らも，このような大動乱，大変革の時代に直面し，情勢に迫られて変わらざるを得なかったのだ。彼らの文論も，あるいは正面から，あるいは反面から，あるいは屈折しながら近代文学変革の全体の趨勢を反映して，主流派とともに，色彩目に鮮やかな近代文学変革模様を織り成すことになったのである。

中国における近代文学理論批評の「変化」は，欧州や日本とは異なった独特の特色を持っている。過去を振り返れば，中国文学の歴史は長く，燦然と輝いている。その詩文を正統とし，文語文を表現の主要手段とする雑文学の基礎の上に構築された文論体系は，自ずから統一されて，しっかりして揺るぎない。近代の文学観念は，この母胎の中に育まれ，さらに新しく生まれ出て自立へと向かおうとしたのだ。伝統に潜む惰性，思考の持つ方向性，感情に起こる混乱は，変革を希求する文学者それぞれに外部から内部へと巨大な心理的圧力をかけ，特別に辛い選択を迫るのであった。しかし，近代80年の歴史は，慌ただしく過ぎて行き，特に最後の20年の大変化は，稲妻が走るがごとくであった。革新を目指すものは時代の変化に迫られ，水面に映る影が揺れて消えるように，時代に従って叫び声を

あげたものの，ゆっくり味見も許されず，細かな推敲の暇もなかった。時代の潮流は，波乗りをする若者を，瞬く間に後ろへと投げ捨ててしまったのである。しかし，この80年にわたる変革の歴史は，血と火と涙によって敷延べられたものでもあったのだ。外国からの侮辱を防ぎ，政治を改革し，滅亡を救って存続を計ること，これこそがその時代の最も強調されるところであった。文学は，哲学・史学・宗教などと同様，その変革の呼び声が，この中心問題にすべてしっかりと絡みあっていたので，その直接の功利性を明らかに示すことになったのである。このような選択の難しさ，変革の急進性，強烈な功利性がいっしょくたになって，半植民地・半封建社会に加えられる中，この変革を指導した地主階級の中の先進者と民族資産階級自身の軟弱さ，限定性が，中国文学の近代化の過程にあって，系統性をもち，深く，成熟した理論体系を建築し難くし，バイブル的な意義を持つ大きな成果を実らせることができなかったのだった。けれども，そこで生まれた理論は，それぞれのグループの努力のもとで，結局は，数千年の長きに渡って続いて来た中華民族の文学観念を天地をひっくり返すがごとくに変革したし，近代的な文学創作と翻訳の流行を強力に促進し，社会の歴史の飛躍的な前進を後推ししたのである。それらの理論は，時代に臆する事なく，古い文論体系はすぐにも引退すべきこと，新しい文学体系が今まさに建築されようとしていることを宣言して，五四の新文学が，現代化に向けて大きく前進するために，歴史的な架け橋をかけたのである。中国文学理論批評の近代化が，中国文学発展史全体の上に打ち立てた豊かで大きな功績は，末永く光かがやくものなのだ。

（1994・12・20）

訳注

①中国近代史：中国ではアヘン戦争以後，五四運動まで（1840-1919）の文学を「近代文学」，以後人民共和国成立まで（-1949）を「現代文学」，それ以後は「当代文学」，さらに文革終了後の文学（1976-）は「新時期文学」と呼んでいる。だが，1917年に始まる文学革命以後を「近代文学」とする説や，そもそも「近代」と「現代」という呼称自体を問題とする議論も有り，分期には様々な問題をはらむ。山田敬三氏「中国文学の近代と前近代」（1988年『未名』7号）等参照。

五四運動：1919年5月4日，北京の学生数千名による抗議デモを端緒とする。第一次大戦に乗じた日本の山東半島侵略を容認したパリ講和条約に激怒した民衆は各地でストを敢行し，これを契機に改革の気運が一気に高まった。文学界でも期を一にして儒教批判や

言文一致の近代化運動が急速に進行した。

②龔自珍（1792-1841）：字は爾玉，号は定盦。浙江省杭州の人。官僚の家に生まれ，外祖父は清朝音韻学の段玉裁。1829年（道光9年，38歳）の進士。『龔自珍全集』がある。著作は極めて多く，その詩は恋愛や憂憤の情を直截に詠み込んだ斬新なもので，一世を風靡した。彼の文学の特徴として，衰世であるが故の哀怨や怒りの表現を強く求めたこと，自らの情感を尊び，真情を記すことを提唱したこと，人と詩とが調和する美学原理を提起したこと，《荘子》《離騒》の芸術風格を推奨したことなどが指摘されている。原書第二章第一節に詳論。

③梁啓超（1873-1929）:字は卓如，号は任公，飲氷室主人などの別号あり。広東省新会県の人。17歳で擧人に合格してより後，康有爲に師事，変法維新運動に奔走する。1898年，戊戌変法の新政が百余日で潰えると日本に亡命。横浜で《清議報》を創刊，引き続き改革を鼓吹した。一方で彼は中国最初の文学雑誌《新小説》を創刊するなど近代文学の発展にも多大な足跡を残した。後出の「詩界革命」「文界革命」「小説界革命」「戯曲改良」の項で詳述。原書第五章にて詳論。

④太平天国：1851-1864。広東省出身の洪秀全がキリスト教的平等を思想基盤として，反清，反帝をスローガンに起こした農民主体の革命。南京（天京）を首都とし，清朝と対峙する影響力をもった。文学面でも白話の採用など大衆的通俗的側面を重視し，後の近代文学運動の萌芽を胚胎していた。

⑤徐継畬（1795-1873）：字は松龕，山西省五臺県の人。1826（道光26）年の進士，編修を授けられ御史に遷る。後に福建，広東等の地に赴任，アヘン戦争や太平天国軍の鎮圧に功があった。

梁廷枏（1796-1861）:字は章冉，広東省順徳県の人。『広東海防彙覽』，『粤海關志』等の纂修に参加，ために当時の国際情勢に精通する。著作も多岐にわたるが，戯曲理論を説いた《曲話》5巻がある。彼は戯曲の社会効用を提起し，またその創作理論は王國維の「意境」「自然」各説に顕著な影響を与えた。第八章第一節に詳論。

「經世致用」：「経世」は国を治めること，「致用」は『易』にある言葉で必要なものを集めて用意すること。原書では，その顕著な例として，魏源の《皇朝経世文編》を引く。第二章第二節「魏源及馮桂芬，王韜」に詳説。

⑥魏源（1794-1857）:字は默深，湖南省邵陽県の人。1845年（道光25年，51歳）の進士，官は高郵知州に至る。龔自珍と並ぶ近代啓蒙思想の代表人物で，また林則徐の委託に

より《海国図志》を編んだ。この中で有名な「師夷之長技以制夷」のスローガンを提起して西方民主制度を推奨し，改革思想を宣伝した。彼の文学論は伝統的な儒学の詩学観を出るものではなかったが，文学の現実的意義や社会的な効果を重視し，また創作論に独自の見解を示した。原書第二章第二節に詳論。

姚瑩（1785-1853）:字は石甫。安徽省桐城県の人。1808（嘉慶13）年の進士。1838年，台湾兵備道であった時，抗英戦にて誣告されて獄に入り，四川からチベットに送られる。後に広西按察史を授けられ，太平天国の乱鎮圧の陣中に病没。彼は桐城派古文の継承者であったが「載道」の伝統に反対し，文学の「經世致用」を説いた。またこの時代には珍しく歴代の文論に基づいた文学批評を展開した。原書第二章第三節に詳論。

林昌彝（1803-1876）:字は恵常。福建省侯官県の人。アヘン戦争勃発の1839（道光19）年の挙人。《射鷹樓詩話》24巻がある。「射鷹」はつまり「射英」の隠語であることからも明らかなように，歴代の詩話とは一線を画し，明確な政治的意図を有していた。詩創作とは，時世を憂え憤るもので，そこに社会的効用性をも具備せねばならないと説いた。原書第二章第五節に詳論。

⑦馮桂芬（1809-1874）：字は林一，江蘇省呉県の人。1840（道光20）年の進士。林則徐の学生で，魏源らと交遊する。西方文化の導入に意を注ぎ，引用文は，張之洞の「中学爲體，西学爲用」の先声として評価される。原書第二章第二節に詳論。

王韜（1828-1897）:字は蘭卿，江蘇省呉県の人。1849年，上海のイギリス宣教師の下で翻訳に従事，西方文化に接触する。彼の文学思想の核心は「自我」の表現であったが，西洋の「自由，民主」に立脚した点で，袁枚らの従来の主張と一線を画する。原書第二章第二節に詳論。

鄭観応（1841?-?）：字は正翔，広東省中山県の人。李鴻章ら洋務派官僚の信任を得て，各種近代企業の設立運営に従事する。引用の《盛世危言》（1893）は彼の主張の集大成で，西洋の器ばかりでなくその淵源に論及した点は，康有爲らの変法論へも通ずる。

⑧黄遵憲（1848-1905）：字は公度，人境盧主人と号す。広東省梅県の人。1877年，初代駐日公使何如璋の参賛官として来日。その後各国総領事を歴任する。康有爲，譚嗣同らと親交があり，1896年，変法運動を標榜する雑誌《時務報》を創刊，梁啓超を主筆に招く。著に《日本国志》・《人境盧詩草》・《日本雑事詩》がある。詩を新思想宣伝，旧社会改造の利器と位置付けると同時に，詩の口語化を提唱，実践し，後の梁啓超の「詩界革命」の先鞭を付けた。

⑨宋詩派：道光，咸豊年間（1821-1861）,何紹基，曾國藩らを中心に宋詩を尊ぶ風潮が起こり，下って同治，光緒から辛亥革命後に至る時期には沈曾植，陳衍らが現れて大いに鼓吹し，近代詩壇に一貫した影響力を示した。原書第二章第六節に詳論。

桐城派：乾隆，嘉慶年間に安徽省桐城の人方苞が提唱，同郷の劉大槐，姚鼐に継承された（この三人を祖とする）古文の一派。「義法」を標榜したが，その内容は朱子，程子らの宋代の道学に従い，形式は韓愈，歐陽脩らの唐宋古文を模範とした。清末に至るまで大きな影響力を有し，新文学運動の中では主要な打倒目標となった。第二章第七節に詳論。

⑩何紹基（1799-1873）：字は子貞，湖南省道県の人。1836（道光16）年の進士。当時の宋詩運動の中心に位置する。彼の論詩の中心思想は「不俗」であるが，従来の「不俗＝雅」でなく，完成された個性の追求を主張した点に意義があった。

梅曾亮（1811-1872）：字は伯涵，湖南省湘郷県の人。1838（道光18）年の進士。官途に恵まれ，礼，兵，工，刑，吏各部侍郎に任ず。また，後には太平天国壊滅の功により，太子太保を加えられ，一等侯爵に封ぜられる。新文学への寄与は認められないものの，桐城派の文論を一歩押し進めたと評される。

⑪曾国藩（1811-1872）:湖南の人。経世派の中心岳麓書院で学び，1838年（道光18年）に進士に及第。後，太平天国の乱のおり，湘軍を率いて制圧に活躍した。彼の文学論は桐城派古文の大成をまとめたものであるばかりでなく，伝統的な古文理論の一つの総括とも見なされる。第二章第7節に詳論。

呉汝綸（1840-1903）:字は摯甫，安徽省桐城県の人。1864（同治4）年の進士。曾國藩に認められ幕下に入り，後期桐城派の主将と目される。西学に傾倒し「実」を重んじて従来の桐城派の文論に軌道修正を促した。第二章第七節に詳論。

厳復（1854-1921）：字は幾道，福建省福州の人。福州船政学堂の第一期卒業生で，英国グリニッジ海軍大学へ留学した。日清戦争後，トーマス・ハックスレーの『進化と倫理』，アダム・スミスの『国富論』，モンテスキューの『法の精神』など西洋社会科学の名著を次々に翻訳する。桐城派古文の名手だった彼の訳文が流麗達意の名訳であったことも手伝って，これらは当時危機感に目覚めつつあった知識層の間に甚大なる影響を与えた。また，「『進化と倫理』翻訳例言」の中では「信」「達」「雅」の翻訳三原則を提唱した。第二章第七節に詳論。

林紓（1852-1924）：字は琴南，畏盧と号す。福建省閩県の人。彼は桐城派古文の末代の大家と目され，「意境」「識度」「気勢」「声調」「筋脈」「風趣」「情韻」「神味」の八つの

面からその古文芸術を概括した。また彼は西欧文学の翻訳に努め，「椿姫」や「アンクル・トムの小屋」ほかその数は三百種にも及ぶ。外国語に通じない彼は弟子に口訳させ桐城派美文で著した。翻案に近いものも多かったが，林訳小説と呼ばれ多くの読者を魅了した。第二章第七節に詳論。

⑫洋務派：アヘン戦争の敗北を契機として西欧の軍事力の卓越性に鑑みた改革運動，1861年の総理衙門（外務省）の設置に始まるとされる。「中体西用論」に基づき，科学技術の受容による富国強兵を企図した。一定の成功を収めるも，清仏戦争（1884），日清戦争（1894-5）の敗北により破綻した。曾國藩，左宗棠，李鴻章ら大官僚を中心とする。

⑬維新派（変法派）：軍事，技術に偏する洋務運動が破綻した後に台頭し，政治と制度の変革，具体的には立憲君主制を主張した運動。戊戌変法をそのピークとし，失敗後は主として亡命先の日本を根拠地に宣伝活動を続けた。やがて台頭してくる革命派と対峙することになる。嚴復，譚嗣同，康有爲，梁啓超に代表される。

戊戌の変法：1898年戊戌の年，康有爲，梁啓超らの意見が光緒帝の信を得て変法自強の詔が出された。だが数々の改革案は反対派官僚の妨害に遭って実施されず，西太后のクーデターにより挫折，「百日維新」と呼ばれる。康有爲，梁啓超は亡命，譚嗣同らは処刑された。

⑭「詩界革命」：黄遵憲の提唱した「我手寫吾口」を端緒とする「詩改革」は，戊戌政変後，亡命先の日本で旺盛な執筆活動を行っていた梁啓超によって「革命」として提起された。その内容は，古風格を備えつつも新しいイメージ，新しい用語を盛り込み，さらに西欧の思想精神を大いに導入するというものであった。

「文界革命」：やはり梁啓超によって提唱された「文界革命」は，詩と同様に西欧新思想の注入を起点としたが，散文の分野でジャーナリストとして健筆を振るっていた彼は「新民体」など独自の文体を生み出し，実践上でもみずからその先頭に立った。最大の功績はいわゆる「俗語文学」つまり言文一致の白話文学を強く押し進めたことである。

「小説界革命」（「戯曲改良」）：従来「小道」として蔑まれてきた小説を梁啓超は正統かつ有用な文学作品と位置付けた。社会効用性と政治変革への貢献を強く主張するその議論は，日本の政治小説「佳人の奇遇」の翻訳序文たる《訳印政治小説序》や，彼が横浜で創刊した中国初の近代小説雑誌《新小説》に発表された《小説與群治之關係》などを最とする。

⑮中国（革命）同盟会：1905年，東京の日本留学生の間で結成された革命団体。機関誌

は『民報』で，綱領として「韃虜（満州族）の駆除，中華の回復，民国の建立，地権の平均」を掲げた。同盟会はそれまで個別に活動していた孫文の広東系の興中会，黄興，宋教仁ら湖南系の華興会，章炳麟，蔡元培ら浙江系の光復会の3つの秘密革命結社の大同団結であった。

⑯章太炎（1869-1936）:名は炳麟，字は枚叔，太炎は號。浙江省餘姚県の人。經學者兪樾に師事するも，日清戦争後は変法維新運動に参加する。戊戌変法を経て反清革命に転じ，1903年，上海で《蘇報》上に「駁康有爲論革命書」と「『革命軍』序」を発表して投獄される（蘇報事件）。出獄後日本に赴き国粋革命論を宣揚，また魯迅ら留学生に「説文」などの講義をした。ただ，文論におけるすぐれた著作はあまり見られず，言文一致や進化論に反対の姿勢を示すなどむしろ保守的な一面を見せている。原書第六章第一節に詳論。

王國維（1877-1927）:字は静安，浙江省海寧県の人。日清戦争を機に科擧を棄てて新学に志し，羅振玉の東文学社に学ぶ。1900年，羅の出資により日本に留学するが病を得て翌年帰国，師範学校の教鞭を執る。帰国後，カント，ショーペンハウエル，ニーチェら西洋哲学に没頭するが，30歳頃から仕官を機に文学に転向した。辛亥革命後は専ら古代史研究に従事し，北伐の国民革命軍が北京に迫った1927年，頤和園の昆明湖にて入水自殺。各著作については後述。原書第十章に詳論。

⑰流行する一つの時代区分法：例えば北京出版社《中国文学理論史》（5）概述には以下のように述べている。「旧民主主義革命時期の文学理論発展の第2段階は中国資産階級維新派がリードした文学改革運動の興起と＜詩界革命＞，＜文界革命＞，＜小説革命＞理論の成熟を標識とする段階である。その時期はおもに戊戌変法前後の十何年間が含まれる。即ち1895年厳復が《原強》，《辟韓》など4篇の論文を発表し，封建文化への批判を展開し始めてから，1907-1908年に魯迅が《摩羅詩力説》等4篇の論文を作り発表するまで，或は1909年資産階級革命文学団体南社の正式な成立までで終了する。」

南社：1909年柳亞子，陳去病，高旭の3人の発起で作られた清末の文学団体，上海に拠点をおく。会員には新興の資産階級や小資産階級の知識分子が多く属した。1923年解体。期刊《南社》には，文・詩・詞の三種の作品が載せられたが，保守的な傾向を持っていた。原書第六章第三節にて詳論。

⑱呂思勉（1884-1957）:字は誠之，江蘇省武進県の人。辛亥革命前後に中華書局及び商務印書館の編集を努めたが，それ以外はずっと蘇州東呉大学などで中国史の教鞭を執り，近現代史家として著名。西洋美学の観点を運用して小説の性質を分析した《小説叢話》があ

る。原書第七章第九節にて詳論。

管達如（1892-1975）：江蘇省蘇州の人。急進的な《民権報》《民国日報》の記者を努める。古代から近代に至る小説の基本問題を総括的に論じた《説小説》を著し，当時影響の極めて大きかった《小説月報》に連載した。原書第七章第九節にて詳論。

斉如山（1875-1962）：名は宗康，河北省高陽県の人。学者の家に生まれ，1900年以後たびたび欧州に遊学する。辛亥革命後は西洋演劇の紹介に努め，《説戯》ほか多くの著作がある。また梅蘭芳らの役者とも交流し，自分で40余種の戯曲改編も行った。原書第八章第九節にて詳論。

馮叔鸞（1833-?）：名は遠翔，河北省涿県の人。北京にて幼時より観劇を好んだ。1912年上海に移ってから演劇評論を開始，その評論は《小春秋》・《海話》・《上海小説》などの雑誌に散見され，演技と訳者を論じたものを中心とする。だがあくまでも旧劇を対象としており，新劇は軽視した。原書第八章第六節にて詳論。

鄭正秋（1889-1934）：広東省潮州の人。宦官の家に生まれる。映画開拓者としてその名を知られるが，辛亥革命前後には雑誌記者を努める傍ら演劇関係の言論を発表し，相当の影響力をもった。原書第八章第七節にて詳論。

⑲蒋智由（1866-1929）：字は心斎，浙江省諸暨県の人。日清戦争以後，努めて変法を説く。1902年日本に留学，梁啓超と交流し，後には光復会などに参加して革命に投じた。だが1907年以後，君主立憲派に転向する。その文学批評については後注参照。原書第五章第七節に詳論。

⑳高旭（1877-1925）：字は天梅，上海の人。1903年《覚民》月刊を創刊。1904年，日本の法政大学に留学，孫中山と識り，《醒獅》雑誌を創刊する。1905年帰国後は中国同盟会江蘇分会長に任じ，南社の成立に重要な役割を果たす。詩歌理論の書がある。原書第六章第三節に詳論。

周樹人（1881-1936）：すなわち魯迅，浙江省紹興県の人。引用の《月界旅行弁言》《魔羅詩力説》及び周作人の論文はすべて日本留学中に同盟会機関誌《河南》に掲載されたもの。本文ではこれらの文章に西洋文学哲学理論を導入することによって中国を改造しようとした周兄弟の意志がもっとも端的に表明されるとする。鴎外や上田敏ら当時の日本のロマン主義の影響も顕著で，因みに魯迅は「魔羅詩力説詩派」としてバイロン，シェリー，プーシキン，レールモントフ等を挙げる。原書第六章第四節に詳論。

周作人（1885-1967）：魯迅の弟。1906年から09年にかけて東京にて魯迅と同居，雑

誌《新生》発刊や翻訳《域外小説集》出版に共同で携わる。原書第六章第四節に詳論。

㉑曹丕（187-226）：曹操の皇太子として，曹操の死後魏を継ぎ，同年（220）漢に代わって魏朝を建てた。その著《典論》中の《論文》の文章は，曹丕の文学論が語られており，当時の文学観を知るのに貴重な資料となっている。シリーズ《魏晋南北朝文学批評史・第二章曹魏文学批評第一節曹丕・曹植》に詳論。

馮夢龍（1574-1646）：《喩世明言》・《警世通言》・《醒世公言》のいわゆる「三言」，及び《拍案驚奇初刻》・《拍案驚奇二刻》のいわゆる「二拍」の短編小説集の編者として知られる。小説の通俗性を強調し，小説に描かれる「男女の情」に関する評論には，「情」をきわめて重視する視点がある。シリーズ《明代文学批評史・第12章晩明的小説批評第三節関与短編小説集「三言」，「二拍」的評論》に詳論。

㉒方東樹（1722-1851）：字は植之，安徽省桐城県の人。22歳のとき江寧に赴き姚鎣や梅曾亮らと共に桐城派古文の姚鼐に教えを受ける。彼は程朱理学の理念を受け継ぎ，桐城派の「有物」説によって詩文の「実用」を説いた。第二章第七節に詳論。

㉓陳去病（1874-1933）：字は佩忍，江蘇省呉江県の人。1898年，同郷の金天翮らと雪恥学会を設立する。《警鐘日報》《国粋学報》等の編集に携わり，《二十世紀大舞台》は彼が主編した中国初の革命演劇雑誌だった。1906年に中国同盟会に加入，南社設立の中心人物となる。原書第六章第三節に詳論。

㉔黄遠生（1881-1915）：名は為基，江西省九江県の人。1904年に日本に留学。辛亥革命後は北京で新聞記者として活躍した。1914年にはシェークスピアやイプセン等を引きつつ西洋演劇理論を系統的に紹介した《新劇雑論》を《小説月報》に発表し，「新劇」を論じた。第八章第八節にて詳論。

㉕《古文辞類纂》：清・姚鼐の編集による古文総集。唐宋八大家の文章，いわゆる「古文」を主とした総集で，簡明をめざす桐城派の散文観を代表し，広く流行した。

《経史百家雑鈔》：曾国藩編。《古文辞類纂》に基づき分類し編集しなおしたもの。

㉖金天翮（1874-1947）：字は松岑，江蘇省呉江県の人。1903年，上海にて愛国学社に加入，章炳麟，蔡元培らと出会い，《国民新霊魂》《自由血》等を書いて注目された。文学の社会改造への貢献を説き，文学自体の変革を主張した。原書第六章第二節に詳論。

黄人（1866-1913）：江蘇省常熟県の人。1901年，蘇州に東呉大学が設立された際，章太炎と共に招かれて文学教授となる。また曾樸らと《小説林》社を起こした。彼はその著《中国文学史》の中で「真善美」の基準で文学作品を批評することを提唱した。原書第九

章第六節にて詳論。

徐念慈（1875-1908）：江蘇省常熟県の人。1907年，黄人らと小説月刊《小説林》を創刊し，後には彼が主編となる。彼はヘーゲルやカントの美学的観点に依拠して小説芸術の特徴を探求し，新小説流行の原因を跡付けした。第七章第六節にて詳論。

㉗李贄（1527-1602）：泰州学派王襞の門人で，天下の名文はすべて完全に純真で本源となる心情の童心に源を持つという童心説を文学主張とする。公安派の先駆けに位置づけられる。シリーズ《明代文学批評史・第八章晩明的詩文批評第一節公安派的先駆，第七章明代中期的小説批評第二節》に詳論。

王学泰州派：陽明学の流派の一つ。清・黄宗義の分類による。泰州の人王艮を始めとする。李贄の師にあたる王襞はその子。彼は自然の現象と人間の生理を共に「道」として，宋明道学の煩瑣な修養の学に打撃を与えたという。

㉘袁宏道（1568-1610）：湖北省公安の人。明万暦20年の進士。従来の復古主義に反して，性霊を表出し，規範にこだわらないという主張をもつ公安派の代表詩人。シリーズ《明代文学批評史・第八章第二節袁宏道》に詳論。

㉙譚嗣同（1865-1898）：字は復生，湖南省瀏陽県の人。変法維新運動の急進派で，戊戌政変の失敗に殉じた。彼は新聞，雑誌の宣伝効果の面から「新聞文体」を提唱したが，文体革命に大きく貢献した。原書第五章第六節に詳論。

陳子褒（？）：名は知乎，子褒は字。広東省新会県の人。1899年《論報章宜改用浅説》にて，民智を開くために文語文の改革を訴えた。

裘廷梁（1857-1943）：字は葆良，江蘇省無錫の人。若くして古文の名手とうたわれたが後に洋学に傾倒，維新運動に投じた。特に白話文の提唱に意を注ぎ「白話学会」を組織し《白話叢書》を編んだ。第五章第六節に詳論。

夏曾佑（1863-1924）：字は穂生，浙江省杭州の人。1892年に梁啓超と知り合ってより西洋文化に傾倒，維新派に投じた。1896年に譚嗣同らと新学詩を提唱，1897年には嚴復らと天津で《国聞報》を創刊し，上海の《時務報》と呼応して戊戌変法を推進した。原書第七章第四節に詳論。

王照（1859-1933）：字は小航，河北省寧河県の人。1894（光緒20）年の進士。戊戌の変法にて皇帝の外遊や教育部を設置して西学を導入することなどを献言した。文字改革に努力して，表音文字を作ろうとした。政変後は日本に亡命。

㉚大量の口語読物：裘廷梁らの倡導の下，当時創刊された白話新聞は以下のようなものが

ある。《無錫白話報》（1898），《杭州白話報》（1901），《蘇州白話報》（1901），《楊子江白話報》（1904），《中国白話報》（1903），《紹興白話報》（1903）など，統計によれば清末民初に総計百七十餘種出たという。

㉛康有爲（1858-1927）：字は広廈，広東省南海県の人。変法派の中心思想家。明治維新に倣った変革を光緒帝に進言，容れられて1898年，戊戌変法を成就させる。政変失敗後は次第に保守化し，孔子教の国教化主張，張勲の復辟運動への参加など反動化の一途を歩んだ。文学批評の上では先導的役割を梁啓超に譲るが，梁の影響下に「文界革命」の一翼を担った。

㉜樊増祥（1846-1931）：字は嘉父，湖北省恩施県の人。1877（光緒3）年の進士。袁枚の影響を自負する。彼の詩学は広く古人に学ぶことを旨とし，当時の「詩界革命」「新詩運動」は一顧だにしなかった。

㉝劉勰：南朝時代を代表する文学論《文心雕龍》五十篇の撰者。上篇二十五篇が主に文体別の文学史となっており，下篇二十五篇には文学を巡る問題別の篇が配列されている。「比興」はその下篇中の比喩の技法に関しての一篇。《文心雕龍》に関してはシリーズ《魏晋南北朝文学批評史・第二編南北朝文学批評第三章劉勰《文心雕龍》》に詳論。

㉞葉昼（？）：明代中期の人。現存する容與堂本《李卓吾先生批評忠義水滸伝》一百回は，彼の手に成る。この引用は第三回総評の文。《明代文学批評史》第七章第二節参照。

金人瑞（1608-1661）：号は聖嘆。明末清初の小説，戯曲批評家。《西相記》への批評がよく知られている。

閑斎老人：現在見られる《儒林外史》の最も早い版本，臥閑草堂本につけられた序文の筆者。呉敬梓本人という説もあるが，復旦大学の王運熙・顧易生両先生主編の《中国文学批評史・下》では，閑斎老人と臥閑草堂主人及び臥閑斎堂本の評者とは同一人物ではないかと推測していて，呉敬梓とは考えていない。この序文では，《儒林外史》の基本思想が，知識分子の功名や富貴の追求への批判にあることを明示している。《中国文学批評史・下》（上海古籍）》第六編・第六章・第四節参照。

㉟陳廷焯（1853-1892）：江蘇の人。1888（光緒10年）に挙人となるが，一生官に就かなかった。中国詞論史で最大の量を誇る《白雨斉詞話》を代表作とする。その自叙に「温厚をもって本体とし，沈鬱をもって表現形とする」と言うところから，通常彼の詞論は「沈鬱」説で概括される。原書第三章第二節に詳論。

孔広徳（？）：山東省曲阜の人。《普天忠憤集》は1895年の刊。日清戦争敗北に刺激

されたもの。

劉鶚（1857-1909）：字は鉄雲，江蘇省鎮江の人。科擧受験を棄て医者，書店経営など実業に従事する。黄河治水に功有り登用されるも，外資導入による鉱山開発建議は強い批判を浴びる。また甲骨文を初めて学界に紹介した。《老残遊記》は作者が晩年に執筆した小説で，その序に「そもそも哭泣するというものは霊性の現れである。霊性がいささかでもあればそれだけ哭泣するものなのだ。」と説き，《離騒》に淵源する歴代の「哭泣」書を中国小説の伝統形態と位置付ける。

㊱《詩藪》：明代胡応麟（1551-1602）の撰。全20巻で内・外編に分かれる。内編では詩歌各体の起源と変遷を述べ，外編では時代毎に作家作品を評論する。胡応麟は，明代の嘉靖末から万暦初年にかけておこった文学復古運動の領袖王世貞に激賞された。王世貞が論じた格調説の集大成者と見なされている。シリーズ《明代文学批評史・第五章明代中期的詩文批評（下）第三節胡応麟》参照。

㊲劉熙載（1813-1881）：江蘇省興化県の人。1844（道光24）年の進士，官は広東提学使に至る。《芸概》は晩年に執筆され，当時流行していた代表的な文体について論評したもの。歴史学者的な視点で貫かれ，分体文学史とも呼ぶべき書となっている。

㊳劉師培（1884-1919）：江蘇省揚州の人。1904年，革命団体光復会に加入《国粋学報》などの急進的な雑誌上で活躍する。1907年には日本に亡命，同盟会に入会。一時は章太炎と並び称されるも後に反動化した。文学史研究に功績有り。《中国中古文学史》は北京大学での講義ノートで魏晉南北朝文学の評論。彼の文学批評は「飾」を「文」の基本とする立場から韻律や対句を重んじ，駢文を文章の正宗と位置付けるなど一定の限界を有する。原書第第九章第五節に詳論。

㊴蠡勺居士訳《昕夕閑談》：1873年から75年にかけて《瀛寰瑣記》に連載。

㊵呉沃堯（1866-1910）：広東省広州市の人。1903年から雑誌《新小説》に小説《二十年目睹之怪現状》を発表する。1906年には上海で《月月小説》を創刊し，次々に小説，評論を執筆，一貫して社会の問題点を掲示し続けた。原書第七章五節に詳論。

王鍾麒（1880-1913）：安徽省歙県の人。小説批評に小説史の観点を取り入れ《中国歴代小説史論》を書いた。その中で例えば《紅楼夢》を取り上げ，この「悲劇中の悲劇」はシェリーやユーゴーにも比肩すると，中国古代小説の価値を称揚した。原書第七章第七節に詳論。

㊶周剣雲（1893-1967）：安徽省合肥の人。「新劇」は社会に有用な崇高な芸術たること

を主張し「新劇革命」を提唱，戯曲の「折衷主義」「法治主義」を説いた。

姚華（1878-1930）：貴州省息烽県の人。1904（光緒 30）年の進士。日本留学。従来あまり重視されなかった諧謔，諷刺，ユーモア等の要素に着目した。引用の《曲海一勺》は戯曲の刷新を唱えた彼の代表作。

主要参考書目（日本）

『中国詩人選集二集』（1962・63 年，岩波書店刊）
『中国の思想家（下巻）』（1963 年，勁草書房刊）
島田虔次『中国革命の先駆者たち』（1965 年，筑摩書房刊）
『中国古典文学大系 58・清末明初政治評論集』（1971 年，平凡社刊）
『中国文明選』（1972 年，朝日新聞社刊）
『原典中国近代思想史』（1976・77 年，岩波書店刊）
『中国現代文学事典』（1985 年，東京堂出版刊）

参考資料 1　《近代文学批評史・目録》

第一章　緒論：中国文学批評史的近代化
第二章　伝統詩文批評
第 1 節　龔自珍　　第 2 節　魏源及馮桂芬，王韜
第 3 節　姚鼐，張際亮，湯鵬　　第 4 節　包世臣，蔣湘南
第 5 節　林昌彝　　第 6 節　何紹基，陳衍與宋詩派
第 7 節　梅曾亮，方東樹，曾国藩，呉汝綸，厳復，林紓等桐城派
第 8 節　方玉潤，朱庭珍　　第 9 節　王闓運，張之洞，李慈銘
第三章　詞論
第 1 節　譚献，馬煦　　第 2 節　陳廷焯
第 3 節　王鵬運，況周頤與鄭文焯　　第 4 節　謝章鋌
第四章　太平天国的文化政策及洪仁玕
第 1 節　太平天国的文化政策　　第 2 節　洪仁玕
第五章　梁啓超與資産階級維新派的文学革新運動
第 1 節　梁啓超的生平和著作　　第 2 節　梁啓超與「詩界革命」

第3節　梁啓超與「文界革命」　第4節　梁啓超與「小説界革命」
第5節　黄遵憲，康有為　第6節　譚嗣同，裘廷梁
第7節　蔣智由　第8節　丘逢甲與邱煒萲，潘飛声
第六章　資産階級革命派的詩文理論
第1節　章炳麟　第2節　金天翮
第3節　陳去病，高旭，柳亜子與南社　第4節　早年的周樹人與周作人
第七章　小説論
第1節　王希廉，陳其泰，哈斯寶，文龍等小説評点
第2節　俞樾與狭義小説論　第3節　韓邦慶與狭邪小説論
第4節　夏曾佑，狄葆賢，陶佑曾等小説論
第5節　呉沃尭與李寶嘉，劉鶚　第6節　徐念慈，黄世仲兄弟等小説論
第7節　王鍾麒，黄人，燕南尚生的中国古典小説論
第8節　林紓與周樹奎，孫毓修的翻訳小説理論
第9節　管達如的《説小説》與呂思勉的《小説叢話》
第八章　戯劇論
第1節　梁廷枏及楊恩寿　第2節　余治
第3節　欧渠甲，陳独秀，蔣智由　第4節　《20世紀大舞台》
第5節　呉梅與姚華　第6節　馮叔鸞
第7節　鄭正秋與周剣雲　第8節　黄遠生
第9節　斉如山
第九章　中国文学史学
第1節　張維屏　第2節　劉熙載
第3節　平步青　第4節　林伝甲
第5節　劉師培　第6節　黄人
第十章　王国維
第1節　王国維的生平，思想的著作　第2節　早期論文中所表現的文学観
第3節　《紅楼夢評論》　第4節　《人間詩話》
第5節　《宋元戯曲史》
結語

参考資料 2　≪近現代文学批評史≫ 簡年表

1840	アヘン戦争		龔自珍										
1842	南京条約、香港割譲	1841		張維屏		魏源							
	上海・広州等五港の開港												
1850	太平天国乱起る	曾国藩	1852		劉熙載					1848	黄尊憲		
1857	英仏連合軍広州占領					1857			1858				
1858	愛琿条約、天津条約締結												
1860	英仏連合軍、北京に侵入			1859									
	九竜半島割譲、沿海州割譲		林紓										
	(英)　(露)												
1864	太平天国乱鎮定							1869				1873	
1870							1874						
1875	西太后、徳宗を擁立	1872		1877									
1880									章炳麟				
1881	伊梨条約締結(露)			1881		1881							
1884	清仏戦争			1884									
1885	天津条約締結				1885								
				王国維			陳去病	金天翮		康有為		梁啓超	
1890													
1894	日清戦争起る				劉師培								
1895	下関条約締結(日)												
1898	膠州湾、関東州、威海衛の租借地化												
	戊戌の政変失敗												
1899	フランス、広州湾を租借、義和団の乱												
1900	各国連合軍、北京占領												
1901	北京議定書成立												
1905	科挙の制度廃止、中国革命同盟会結成									1905			
1909	南社成立					周作人	周樹人						
1910													
1911	辛亥革命起る												
1912	孫文南京にて臨時大統領に												
	清滅亡、中華民国成立												
1913	孫文、第二革命失敗　袁世凱大統領に												
1915	日本の 21 ケ条要求受諾												
1916	軍閥割拠、争乱の時代へ												
1919	五四運動京北に起り全国に拡大				1919								